

社会貢献の功績

- ▶精神的、肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧、幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性を備えた活動により、社会に尽くされた功績
- ▶海の安全や環境保全、山や川などの自然環境や絶滅危惧種などの希少動物の保護に尽くされた功績



進藤 和昭

..... 052



高本 エリック/
高本 スーザン

..... 054



ミャンマー/
ビルマご遺骨帰国運動

..... 056



特定非営利活動法人 POSA

..... 058



認定特定非営利活動法人
ジャパンハート

..... 060



谷川 洋

..... 062



AAA アジア&アフリカ

..... 064



シスター黒田小夜子

..... 066



認定 NPO 法人
地球市民の会

..... 068



特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク

..... 070



NPO 法人
日本ベラルーシ友好協会

..... 072



特定非営利活動法人
アクセス・共生社会をめざす地球市民の会

..... 074



ピナット
～外国人支援ともだちネット

..... 076



イースターブレッジ・
ミンダナオを支える会

..... 078



平野 喜幸

..... 080



久野 美奈子

..... 082



袴着 英子

..... 084

進藤 和昭



社会福祉法人 野の花学園
総合施設長

勤務先の障害者支援施設、「第一野の花学園」（福岡市西区今津）の隣に、鎌倉時代の蒙古襲来の際に命を落としたモンゴル人の慰霊碑として建てられた「蒙古塚」が荒れ果て、放置されていることに心を痛め、自分たちの手で保全管理しようと、2004年に県に譲渡要請を行い、有償で譲り受けることとなった。以来、蒙古塚を公園として整備し、保全管理を野の花学園の利用者らと行っている。同2005年に開催した「蒙古塚公園慰霊祭」には、在日モンゴル大使をはじめ多くのモンゴル人が参列し、慰霊祭は毎年開催されるようになった。モンゴルとの交流は、親善訪問や、アジア太平洋立命館大学のモンゴル人留学生を通じて更に深まり、両国の橋渡し役となった進藤さんは2015年にモンゴル政府から「北極星勲章」を授与された。

「日々感謝」

先ず、この度の社会貢献者表彰の栄えある受賞に授かり、ご推薦とご選考をいただきました委員の方々をはじめ、ここまで支えて戴きました皆様にあたためて感謝の意を表します。

私は、21歳の時に社会福祉法人野の花学園に入職し、68歳の今日まで47年間障がい者支援の現場で働いております。当法人の設立は、昭和34年に我が子の将来を案じた5人の母親が、行商や募金活動をしながら立ち上げました。その姿は、当時のNHK放送で「五つの灯」として放映されました。

また、当施設を訪れたノーベル文学賞作家のパールバック女史は、“不幸な子を持つことは決して不幸ではない。そのことに手を差し伸べないことが不幸である”と言って、5人の親を励ましたそうです。

私はこの言葉に深い感銘を受けてここまで頑張ってきたし、それは障がい者ではなく、それぞれのハンディを個性として受け止め、私に関わりを与えてくれた数えきれない人達によって福祉への使命感を教えて貰いました。

当時、私が勤務していた障がい者支援施設第一野の花学園（福岡市西区今津4820）の傍らに「蒙古塚」がありました。これは、1274年（文永の役）、1281年（弘安の役）の蒙古襲来（元寇）によって亡くなられた両軍の兵士を慰霊して建立されたものです。

当時は県有地であったこの場所を譲渡して頂き、2004年に「蒙古塚公園」として整備して慰霊祭を実施しました。2005年より「今津福祉村モンゴル友好親善団」を結成しモンゴルとの民間交流が始まりました。

その後、“聖なる兵士の墓”とモンゴル語で記した慰霊碑や、“温故知新 蒙古襲来の教訓は、恒久平和と友愛、未知なる幸せと夢を説く”と記した石碑を地域の方々の

協力を得て新たに設置しました。

モンゴルとの人的交流も深まり、ホームステイの受け入れ、留学生の生活・就労支援へ交流の輪も広がっています。

社会福祉法人野の花学園としても、福祉のグローバル化を推進しながら国際貢献事業に寄与していく所存です。

私自身、福祉の仕事を通じてこの地域に係わったこと、この地域に元寇の歴史が存在したこと、地域の理解と協力があったこと、モンゴル関係機関や現地関係者との繋がりに恵まれたこと、計り知れない多くの縁がこの度の受賞に至ったものと感謝いたします。

社会福祉法人 野の花学園
総合施設長 進藤 和昭



▲モンゴル友好協会



▲慰霊碑蒙古塚



▲第一学校給食風景



▲留学生と



▲フビライハンと神風撮影隊と



▲フビライと神風撮影風景

高本 エリック／高本 スーザン



宮城県

東日本大震災発生以来、石巻市を何度も訪れ瓦礫撤去作業などのボランティア活動を行う内、翌年に一家で兵庫県から同市に移住した。地元の女性たちが働く場所を求めている事を知った夫妻は、瓦礫撤去の際に見た陶磁器のカケラをリメイクしたアクセサリー作りを思い付き、女性たちやボランティア仲間とサンプルづくり、ジュエリー作りの技術習得を始め、2012年に「のぞみ（希）プロジェクト」を設立して雇用を創出している。ジュエリーはこれまでに40ヵ国へのネット販売を中心に約3万個販売された。

（推薦者：青柳 泉、青柳 友子、榎本 恵子）

外国人として、今回の授賞式の参加にあたり、何を期待すればいいのかわかりませんでした。このような賞をいただけてとても光栄であると同時に、驚きで言葉がみつかりませんでした。他の受賞者の方々の活動を知ることができ、またその方たちと同じように表彰されたということに、とても心へりくだる思いです。今回の受賞者の方々のように、自己犠牲を払ってでも国内・海外を問わず周りの人のために貢献していることを認識される事は日本の社会にとって、とても重要な事に思えます。自分たちがこの受賞に値する様には自分たちでは思いませんが、今回この様な授賞式によんでいただき、また石巻での活動を紹介していただけた事は、私たちにとってとても光栄な事であり。本当にありがとうございました。

今回の受賞は、私たちが石巻で活動している団体ビーワンの同僚たちを代表して受賞したという様に受け止めています。ビーワンは震災後に様々な土地から被災地に引越して来た日本人、アメリカ人のクリスチャンから成り立っている団体です。ビーワンはこの6年間、様々な形で被災地の方々の癒しのプロセスに寄り添って来ました。その一つとして始まったのが、のぞみプロジェクトです。のぞみプロジェクトは石巻の女性の雇用を創出するため、瓦礫撤去の際に出た陶磁器のカケラをリメイクしたアクセサリーを作り、販売する会社です。今までに30人以上の女性を雇用し、ジュエリーはネット販売を中心に40ヵ国へ約3万個販売されました。

この6年間のビーワンでの活動の中でとても喜ばしい成果は、石巻の友達と共に、他の災害被災地（和歌山市、常総市、岩泉、熊本等）へ奉仕活動に行けた事です。石巻の被災者の方々が、他の地で同じ様に家や家族を失った方々に寄り添い、手伝い、励ます事によって、自分たちも受け取るだけでなく与える事ができるという事が、彼らにとっての癒しのプロセスにとっても重要だと感じました。聖書に『いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです』

という言葉があります。私たちはこの聖句が大好きです。石巻のために引っ越すと決めた事は、とても良い決断だったと今でも思っています。ですから東北の友人、石巻の大好きな女性たち、そして共に働く同僚たちを代表して、この賞をいただきたいと思ひます。



▲津波に流された陶器



▲エリックさんとハイチームのボランティアが地域のためにバーベキューの用意



▲熊本地震後、現地に石巻から駆けつけたエリックさんとボランティア



▲エリックさんと地域の子もたちで近隣公園の瓦礫の片付け



▲エリックさん、スーザンさんと地元の女性たち



▲希（のぞみ）プロジェクトのスタッフ 2016年



▲ボランティアが「カケラ」を集めて洗っています

ミャンマー／ビルマご遺骨帰国運動



統括幹事

川原 英照



小島 知広



柳下 純悠

神奈川県

ミャンマー（ビルマ）に残された旧日本兵の遺骨調査の活動資金を集める運動を2012年から行っている。同国には4万5千に及ぶ日本兵の遺骨があると厚生労働省では推測しているが、同国の近年の民主化と平和の進展で、これまで立ち入ることのできなかった少数民族支配地域に、民間レベルで遺骨の事前調査が可能な状況になった。この運動は教派や宗派を超えた日本の宗教者と、運動の趣旨に賛同する国内外のボランティアなどによって運営されている。この活動により、2016年3月4日にミャンマーから十柱のご遺骨が帰国した。現在、協力関係にあるNPO法人によって、遺骨収容活動が継続されている。

あれは5年前の夏の事でした。昨年、既に本賞を受賞された井本勝幸さんから、突然国際電話が掛かってきました。

「私がミャンマーの少数民族の大同団結を成し遂げた後、現地の古老から『最近、日本人の僧侶が我々の近くで和平に尽力しているそうだが、その人にぜひ伝えてくれ！ 私は先の大戦で亡くなった部下たちの墓を長年守ってきた。だがもう私の寿命も尽きようとしている。どうか部下（旧日本兵士）たちの遺骨を祖国に連れ帰ってくれるように伝えてくれ！』と聞きました。なんとかその人の願いを叶えてあげたいと思います。幸いにも少数民族の人達が協力してくれる事になっています。どうか日本国内で仲間と共に調査費募金の協力をして下さい」という衝撃の内容でした。

早速「宗派を超えてチベットの平和を祈念し行動する僧侶・在家の会」（略称スーパーサンガ）と、井本さんが創設された「四方サンガ」の有志と共に、「ミャンマー／ビルマご遺骨帰国運動」を立ち上げたのが5年前の10月の事でした。以来、国内では同志を増やし、総理官邸や厚労省、外務省との折衝を続け、合せて支援金を募りました。その中にご遺族の方々や篤志家からも続々と浄財が寄せられました。

その後、ご遺骨帰還のための新法成立、それに基づく指定法人が設立される事になり、それまでのつなぎ資金として、延べ4千7百万円余が集まりました。

一方ミャンマーでは少数民族の有志によってご遺骨調査隊が組織され、着々と届くご遺骨の情報を厚労省に報告して参りました。一昨年にはその成果を元に、十柱のご遺骨が遂に念願であった祖国へのご帰国を果たされました。

その後、ご遺骨帰還の為の指定法人設立に前後して、青年達で組織する「JYMA 日本青年遺骨収集団」に現場の実務を引き継ぎ、以後厚労省の予算によって3回の現地調査とご遺骨の帰還が果たされました。

平和な日本社会にあって、先の大戦の尊い犠牲と、その世界史的な意義が忘れ去られようとしている昨今、我々のささやかな運動が先の大戦における多くの英霊達の犠

牲の意味を少しでも広く世に知らしめる機会となった事は望外の喜びであります。

また此度の受賞をきっかけにさらに多くの方々、とりわけ次世代の人々による英霊への感謝とその顕彰への第一歩が始まった事に、我々同志一同誠心で僭越ながら、英霊の皆様と共に深く感謝致しております。

合せて社会貢献財団と日本財団の両団体に対し、心より篤く篤く御礼申し上げますところで御座います。

合 掌
ミャンマー／ビルマご遺骨帰国運動
統括幹事 川原 英照



▲ 2013.1.31 記者会見（於厚労省記者クラブ）



▲ 古老のお話を聞く（2015.2月チン州ティディム）



▲ 埋葬地で慰霊（2015.2月チン州）



▲ 埋葬地で慰霊（2015.2月チン州）



▲ ご遺骨に読経（2015.2月チン州ティディム）



▲ ご遺骨に読経（2015.2月チン州ティディム）



▲ 激戦地で慰霊（2015.2月チン州）



▲ 2016.3.4ご遺骨拝礼式（於厚労省）

特定非営利活動法人 POSA



代表
倉富 彰秀

佐賀県

佐賀県神埼市の眼科医倉富彰秀医師が、1995年の開院と同時に発展途上国の貧困者にアイキャンプ（白内障の手術）を行う団体として設立し、1999年にNPO法人化した。初めはインドでアイキャンプを実施したが、同12年以降は眼科医が国内に100人ほどしかおらず、富裕層以外は手術を受られず白内障で視力を失う人が多いバングラデシュで実施している。事前のスクリーニングは1,000人から2,000人が受け、そこから現地の医師が手術を受ける人の優先順位をつける。現地医師の活動費用も負担している。2014年度は日本から眼科医3名が現地へ赴き、3日間で123名に手術を施した。これまでにインドでは合計756名に、バングラデシュでは合計1,135名の患者に手術を施した。アイキャンプに携わる医師、看護師は自費で参加。医学生や高校生、大学生も自主的に参加しており、未来の若い力の育成にもつながっている。アイキャンプ以外にも、ビタミンA剤の配布やタオル、眼鏡の配布なども行っている。

（推薦者：佐賀県 暮らし環境本部 男女参画・県民協働課）

世界各地にはその経済的事情から、光のない生活を強いられている人々が大勢いることを知り、1995年にアイキャンプという形でインドの北東部にて現地眼科医と共同で個人的に白内障手術による眼科医療援助活動を開始しました。

しかし、個人の力には限界があると認識し、より効果的な活動を目指す為1999年にNPO法人化しました。

2000年より活動地を眼科医が国内に100人ほどしかおらず、富裕層以外は手術を受けられず白内障で視力を失う人が多いバングラデシュで実施しています。

事前のスクリーニングは1,000人から2,000人が受け、そこから現地医師が手術を受ける人の優先順位をつけます。

現地医師の活動費用も負担し、2014年度は日本から眼科医3名が現地へ赴き3日間で123名に白内障手術を施しました。

これまでにインドでは合計756名に、バングラデシュでは合計1,135名の患者さんに白内障手術を施しました。

アイキャンプに携わる医師、看護師、視能訓練士は自費で参加されています。

医学生や高校生、大学生も自主的に参加されており、未来の若い力の育成にもつながっています。

POSAとは、Project Operation Sight for All（すべての人々のための視覚手術計画）の略で、その中の「for All」は、インドやバングラデシュの人々のみならず、全世界の人々のためという意味を含め命名しました。

POSAでは、ALL THAT IS NOT IS LOST（分かちあわれない全てのものは失われる）をモットーに眼科衛生学に関する知識の普及及び白内障、緑内障に対する研究、またその貧しさ故に適切な医療を受けられない人々に対するボランティア医療活動を

行い、その視力回復による社会復帰と自立を促すことを通して国際交流に貢献することを目的としています。

今回、POSAの長年の地道な活動を、佐賀県くらし環境本部 男女参画・県民協働課から推薦され、このような名誉ある賞を受賞したことを大変嬉しく思っております。

また、海難、水難、火事、交通事故等に際し、身命の危険を冒して救助、救援に尽くされた人命救助の功績の方々、社会貢献の功績の団体、個人の方々と共に表彰され今後の活動の励みになります。

書中をもちまして御礼申し上げます。

特定非営利活動法人 POSA

代表者 倉富 彰秀



▲現地眼科医による術前の診察



▲村々からライオンズ病院への送迎



▲手術後の患者さん



▲手術後の患者さん



▲受け入れ先エンゼル協会（孤児院）の子供たち



▲スクリーニングを待つ人々

認定特定非営利活動法人 ジャパンハート



東京都

小児外科医の吉岡秀人医師が中心となって2004年に設立され、「医療の届かないところに医療を届ける」を理念に、国内外で医療ボランティア活動を行っている。ミャンマー、カンボジア、ラオスなど、東南アジア地域での貧困層を対象とした診察、治療や手術、現地の医療人材の育成、また各国のニーズに対応して子ども養育施設の運営、視覚障がい者自立支援、ASEAN 圏内の大規模災害に対する国際緊急救援活動など、多岐に渡る活動を行う。日本国内では、東日本大震災をきっかけに宮城県内にて「こころのケア」活動や、医療者不足が深刻な僻地・離島の病院への医療者人材支援、小児がんと闘う子どもとその家族の旅行をサポートする活動「すまいるスマイルプロジェクト」を行っている。

最高顧問

吉岡 秀人

ジャパンハートは2004年に創設者の吉岡秀人医師（以下、主人）が「医療の届かないところに医療を届ける」ことを目的にミャンマーでの医療活動をスタートしました。

ミャンマーで医療活動を始めるきっかけとなったのは、この地で戦争により家族を亡くした方々が慰霊団に参加する際、医師の付き添いがなければ実現しないという声を受けて、主人が同行を引き受けたことから始まりました。そこでは夫が亡くなったであろう方向に向かってずっと手を合わせている女性、ミャンマー人に助けられて命拾いしたと語る元兵士の男性、流暢な日本語で当時の話を聞かせてくれるミャンマーの老人との出会いがあったそうです。それはまるで長年埋められていたタイムカプセルを掘り起こしたかのような時間で、日本とミャンマーという国と国との間にある沢山のご縁やご恩を知ることとなりました。戦争で大切な家族や仲間を亡くされた方々にとって、この地で生を受けた子どもたちは決して他人ではないのだということを知り、彼らの命に関わることで慰霊活動を引継ぐこと、この地に医療を届けることで国が受けたご恩を返していこうと考え、ミャンマーで医療活動を始めました。

医療活動はジャパンハートの医療者だけではなく、年間約600名を超える日本からの医療者やボランティアの皆さんの手によって支えられています。医療者は自らの休暇を使って手弁当でやってきます。少しでも自分のもつ技術をミャンマーの子どもたちのために役立てたい、国際医療の現場を見てみたいなど動機は様々ですが、彼らがミャンマーの医療現場で得たものは確実に日本の医療現場にも還元されていることと思います。

近年のミャンマーの経済発展に伴い必要とされる医療支援の質、場所、方法も劇的に変化をみせています。変化するニーズに敏感に対応し、本当に必要とされる活動を継続していきたいと思っています。

また、ミャンマーでの活動は医療分野だけにとどまらず HIV 孤児や人身売買の危険に晒されている子どもたちの保護を目的とした養育施設ドリームトレインの運営、盲人マッサージ師の研修制度の整備など多岐に渡る社会福祉活動にも多くの支援者の支えによって継続的に取り組んでいます。

そして今、医療活動はミャンマーだけではなくカンボジア、ラオスにも広がっております。

今回の受賞により、私たちは多くの方に団体を知っていただくこととなり、医療者ばかりではなく一般の方々にも活動に参加していただくきっかけをいただいたのではないかと考えております。これからも皆さまのお力添えのもと、日本とアジア諸国との架け橋になる活動を続けていきたいと思っております。

特定非営利活動法人ジャパンハート
理事長 吉岡 春菜



▲すまいるスマイルプロジェクト



▲医療活動の様子



▲手術の様子



▲医療活動の様子



▲国際緊急救援 フィリピン台風支援



▲養育施設 DramTrain の子ども達

谷川 洋



東京都

「建物を建てて終わり」といった学校建設支援ではなく、「建設後も学校を育て続ける」支援をしようと、2004年に「アジア教育友好協会」をスタートさせた。谷川さんは商社で長年働いた経験を活かし、支援先となるインドシナ半島の現状の調査を数ヶ月かけて行い、2005年のベトナムのパカン小学校を皮切りに、これまでの13年間の活動で合計250校の学校を建設した。建設後の学校の運営資金作りのため、地域住民を巻き込んだ自立支援プロジェクトで学校運営に参加・協力を促していることから、一校も廃校になっていない。これまでに、ベトナム151校、ラオス80校、タイ13校、中国（雲南省）2校、ネパール1校、スリランカ3校を建設した。

（推薦者：石塚 勝巳）

「私の恩返し人生」

＜活動内容＞：AEFA（認定NPO法人アジア教育友好協会）はアジアで学校を建設し、子供達との心の交流を図る

第一は、主としてアジアの山岳少数民族のための学校を建設しています。これまでの13年間で264校（ベトナム156校・ラオス88校・タイ14校・他6校）を建設。

第二は、アジアの子供達との交流事業を推進しています。姉妹提携して、手紙や作品の交換・AEFAスタッフや交流校教師OBによる出前授業でアジアの子供達の素朴で逞しい生き方を伝える。姉妹提携校累計90校・出前授業累計620回。

これら2つの事業を通じて、1）日本の子供達に心の深まりと志の樹立を促すきっかけを提供する。能動的人生に挑戦する自己確立を促す。出前授業により日本の子供達に「生きる力」「人としての心の原点」に気付いてもらう「気付き学習」推進支援となっている。2）現地においては、学校が持つ「村を纏める求心力」と「村発展への推進力」を生み出す。村人参加型の学校建設を通じて、地域力を発揮し自立することを促す。3）国際交流・出前授業を通じて先生・保護者にも教育の基盤とは何か・人間力の育成を考えて貰うきっかけになる。

＜新しい挑戦目標＞：教育再生のお手伝いをしたい

保護者も地域社会も企業も教育を学校に押し付けている。何かあると学校のせいにする無責任さ。小・中学校教育の再生には、教師力・母親力・地域力の再生強化こそが必要である。そのために先ず母親力支援であろう。特に「子育てと家庭教育は母親の崇高なる使命」であるとの認識の上、現代の若い母親達に改めて自信と誇りを持って貰う。このためAEFAでは、保護者が参観する日に出前授業をすることも多い。アジアの子供達の健気な生き方を知ることを通じて親子の対話が進んでいるとの評価も得ている。

＜私の恩返し人生＞：熟年世代よ、立ち上がろう。

一人ひとりが己の責任・立場を自覚し互いに支え合える社会。子供達が志と夢を持って生きる社会。熟年が生き甲斐を持てる社会。その実現の為には、先ず我々熟年が生き方を改革すべきである。我々が受け継いだ素晴らしい社会を次の世代に受け継ぐ

努力をしよう。自分達だけが良い思いをした「食い逃げ人生」ではなく「恩返し人生」を生きよう。超高齢化社会の成功モデルを日本に作ろう。死ぬまで働こうよ。「世の為人の為」に生きる人生こそが幸福な人生である、と叫び続けたい。

＜授賞式に出席して・・・感想＞：日本にまだ希望が持てた。

受賞者の皆様とお会いして「本当に日本には素晴らしい人がいるのだなあ」と感激しました。

「日本にも希望が持てるな」と思いました、私がやってきた活動など、大したことないなと少々気恥ずかしい思いもしましたが、頑張ろうと決意を新たにしました。

認定 NPO 法人：アジア教育友好協会
理事長 谷川 洋



▲笑って！



▲いつも笑顔で交流



▲谷川さんも一緒に作業



▲子どもたちと共に



▲子どもたちの熱烈な歓迎を受ける



▲一致団結！

AAA アジア&アフリカ



埼玉県

埼玉県さいたま市を拠点に、地球家族の助け合いをモットーに国際協力救援自立支援活動を行う団体として1993年に設立された。ケニア共和国、ウガンダ共和国を中心に、必ず現地へ赴き、顔の見える活動を行っている。ケニアでは、植林、井戸掘り、孤児院の支援を行っている。ウガンダでは植林、農業支援、教育支援、サッカーAAAカップの開催、医療支援を行っている。またスリランカではスマトラ沖地震津波被害緊急救援活動を経て、被災10周年慰問や教育支援、日本国内では東日本大震災復興支援活動、グローバルリサイクル活動（眼鏡、鍵盤ハーモニカの収集）などを行っている。

（推薦者：埼玉県県民生活部国際課）

代表

山崎 純子

主人（故山崎城之 AAA 最高顧問）が視察に行った先のケニアで、自分の子と同年代の子供達が泥水を飲んでいる様子に「何とか綺麗な水を！！地を掘れば必ず水があるはず！」と井戸掘りに取り組んだのが活動の始まりでした。以来、「地球家族のたすけあい」をモットーに進んでおります。

「物を大切に」ということで衣類を集めて日本各地から寄せて頂いた真心をその時々でご縁頂いた国に贈らせて頂きましたが、東日本大震災後、放射能を危惧する声が相手国から届き、衣類収集は中止しました。この放射能はアフリカの一国だけでなく行く先々の国で大丈夫かと心配され、大問題だと思っております。また、眼鏡を受け取った人は「これで教職が続けられる」と大変な喜びを伝えてくれた人が何人もいます。鍵盤ハーモニカを吹けた子の得意げな顔なども目に浮かびます。村おこしを兼ねた青少年へのサッカーAAAカップ開催では、若者だけでなくお母さんや子供達を巻き込んで村人の歓声が耳に残っています。小学校への教科書の援助、救急車を贈った後の老人達の感謝の態度、言葉の通じない私の手を引いて助かった病人のところに案内する人が現れたり、村人達の喜びが肌に伝わりました。

地球環境問題に対して AAA で出来る事は植林を！！と毎年微力ながら続けております。また、日本国内でおこっている自然災害、東日本大震災、熊本地震に対する復興支援にも真っ向から取り組んでおります。

この機会に改めて30年来を振り返ってみました。

そもそも専門的知識があつて始めた訳ではありません。「やる気」に日本各地の大勢の方が参加。現地へ一緒に行ってくださいる人、ノウハウ、資金、労力、場所、物を提供して下さった人。これらの何の見返りも求めず協力して下さった方々があつての今日です。その大勢の中でも一部の人でしたが今回の表彰式に参加して頂き、この晴れがましい素敵な場へのお招きで一緒に喜ばせて頂きました。

今回 AAA を推薦下さった方、選考して下さった方、そして表彰式を続けて下さっている財団に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回の受賞でどんなに励みになったことか。私事ではありますが、図らずも孫の中での長子と18番目の今現在一番下の孫も出席できたことで、長く AAA が続けられるのではと期待がもてました。

合掌

AAA アジア & アフリカ
代表 山崎 純子



▲サッカーAAAカップの優勝カップ授与 ウガンダ



▲教科書・机・椅子など学用品の寄贈 ウガンダ



▲埼玉県伊奈町より寄贈の救急車をウガンダへ寄贈



▲埼玉国際交流基金の助成で小学校の校舎建設



▲植林 ウガンダ



▲植林 ケニア



▲村の子ども達と植林 ウガンダ



▲半砂漠地帯で完成した井戸 ケニア



▲食糧や紙おむつなどの支援物資



▲ケニアで井戸掘り

シスター黒田小夜子



東京都

1973年にマリアの宣教師フランシスコ修道会（以下FMM）に入会し、1983年に世界で最も貧しい国の一つとされるブルキナファソのサノロス国立病院に看護師として勤務した。そこで治療を受けているにもかかわらず、栄養失調で多くの子どもたちが亡くなるのを見て、専門の知識を身に付けて実践した栄養処方が成果を上げた。また栄養失調を繰り返す子どもの家庭環境の改善が必要と考え、病院を退職後は、農園、養鶏、菜園、動物飼育をしておの肥料づくり、飼料のための製粉所の設立、植林、自営のための作物販売所も経営し、FMM栄養失調児センター（CREN）を設立した。食料の提供とともに、学校教育のための子どもに寄宿舎も設置した。CRENの運営が現地のシスターに引き継がれた後、2009年からはパキスタンに派遣され、2012年に赤字が続き破産の恐れがあったファイサラバードの聖ラファエル病院の再建を託され、経営不振の原因を解明し、黒字経営を実現させた。2015年8月15日、同病院は国の認定病院とされ、自立自営でFMMミッションを続けている。

（推薦者：海外邦人宣教師活動援助後援会）

この度、社会貢献者表彰式で受賞させて頂いたことは、私にとっては、活躍させて頂いた国、ブルキナファソとパキスタンでのミッション活動が正当で、公益な実りがあったとの社会的評価を受けた事であると思ひ、とてもありがたく又うれしく感じています。

この度の受賞につきましては全て、マリアの宣教師フランシスコ修道会、FMM（私の属する修道会）とJOMAS（海外邦人宣教師活動援助後援会）の恩恵に被るところです。なぜなら世界宣教を使命とするFMM修道会に入会した私を、ブルキナファソと、その後、パキスタンに派遣して下さいしたのはFMM会長であり、そのミッション活動のためにJOMASは、貴重なご指導と資金援助をして下さいましたからです。

1983年、当時はオートボルタと言われていた国、ブルキナファソの第2都市Bobo-DioulassoにあるSano Suro国立病院で正規の看護師として12年間、外科、小児科で働きながら看護師ミッションナリーとしての経験を踏まえた後、栄養失調児を抱える貧困家庭と連体した総括的に問題解決を目指すセンター“CREN St. Francois d'Assise”、アシジの聖フランシスコ栄養失調児センターをFMM会の名義で設立しました。診療、栄養、食事、子供の学校教育をサポートするセンターは農業、動物飼育で自給自足運営を試みるユニークなセンターです。2008年、このセンターは、ブルキナファソの厚生省に医療センターとして登録され、FMMシスター3人が当地に土着化した栄養失調児センターと発展させています。

2009年、第2のミッションは、パキスタンで60年の歴史を持つ100床規模の産科病院「聖ラファエル病院」を10年来の赤字体制から再建することでした。不況原因は病院の使命、パキスタンにあってのFMM病院としての特殊性を失ってしまった事を解明し、ミッション宣言、「貧しい人々に連帯し自然分娩の推進」を実践に移しました。帝王切開の蔓延していたパキスタンにフィットしたのか？ なぜか運営状況

が上向きになり、ミッションを発展させています。以後聖ラファエル病院は国認定病院にされました。

上記2件ともFMM会管轄の事業ですが、プロジェクトの発想は私から始まりその後ミッションチームが結成されたとは言え、修道会側は多くの場合、事後承認の形となったので、多くのぶつかりがありました。私にとっては“神様のお望みのお仕事のために正しい工程を歩んでいる”との思いが唯一の支えでした。今回の受賞はこの私の信念を肯定されたようで感無量です。

FMM、助産師、看護師 黒田 小夜子



▲ミッション チーム



▲チームの皆と



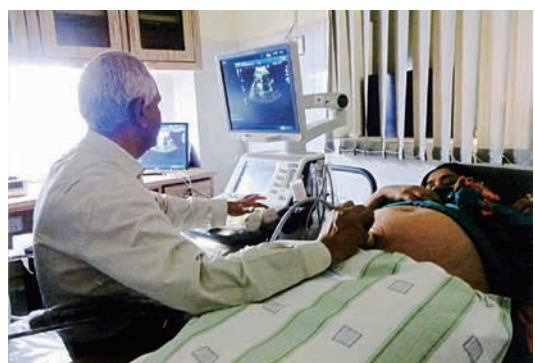
▲病室の様子



▲高額な帝王切開手術にかわる安全な自然分娩を推進しました



▲パキスタン ファイサラバードの聖ラファエル病院



▲シスター黒田は安全な自然分娩を伝える指導を行った

認定 NPO 法人 地球市民の会



佐賀県

1983年に佐賀県で故古賀武夫氏によって設立され、国際協力、国際交流、地域づくりを通して人材育成に取り組んでいる。その理念は「地球市民運動」（多種多様な文化、宗教、民族は等しくその価値を認め、尊重することで自分以外のひとの幸せを自分の幸せだと感じられる人になろうという運動）にある。日韓の偏見と誤解を払しょくする民間交流事業や、タイやベトナム、スリランカでの教育支援、2003年からはミャンマーのシャン州の山岳少数民族のエリアで循環型農業の普及を始め村民が当事者として関わる参加型地域開発や教育支援などを行った。国内においても震災被災地への緊急支援活動や復興支援事業を行っている他、2009年からは限界集落の地域活性化事業にも取り組んでいる。

（推薦者：香月 武）

会長

佐藤 昭二

この度は、第48回社会貢献者の表彰をいただきありがとうございました。

当会は、1983年設立後、海外は東アジア、国内は地元の佐賀を中心に地域の方々と共に地域づくりを行ってきました。今回の賞をいただき、今までの活動に評価をいただいたのは大変な自信にもつながりました。

設立当初、フランス留学から帰ってきた創設者の故古賀武夫氏は国際交流を通して地元佐賀の活性化を目指しました。

地球の中心は自分の足元、九州はアジアの窓口、パリからは東京より佐賀が近い、などと地域の気付きと覚醒を促し「大いなる田舎人」を目指しました。その間、日韓の偏見と誤解を払しょくする民間交流事業「カチガラス計画」を1988年から1994年まで、日本語を学ぶ世界中から日本に来た留学生、韓国・台湾在住の日本語を学ぶ大学生を九州に集め、九州を小さな地球にするという「小さな地球計画」を1986年から2009年まで計20回実施しました。その間、タイのソーシャルワーカーとの出会いがあり、彼から「日本人はバナナのような。皮は黄色いが中身は白い。同じ黄色人種なのに白人の価値観で生きている。アジアの兄弟のことを忘れている」と言われ、1987年タイの貧困エリアに入りその現状を知ります。貧困なために劣悪な環境に生きる子ども、教育を受ける機会がないがために非人道的な扱いを受ける子どもたちを目の当たりにし、途上国の教育支援・生活環境改善事業に取り組みます。その過程で貧困の原因の一つに途上国の現状を知らないがためにわかち合わない先進国の生活に問題があるとして、先進国を発展途上国に対して「発展過剰国」とし、「足るを知り」、相互に与え合う生き方を日本の地域に提唱していきました。その後、タイのみならず、スリランカの教育支援にも取り組んでいきます。

2003年からは軍政下のミャンマー連邦共和国の辺境地シャン州の山岳少数民族のエリアにおいて総合支援事業「循環型共生社会の創造事業」を始めました。奪い合う農業から与え合う農業への転換である循環型農業の普及と途上国の村民の自発的当事者意識をエンパワーメントすることで持続発展する参加型地域開発の実施、共同参画による教育支援事業、人の生活と森の復元による共生型環境保全事業などを実施し地方

部定期的に活動する日本の草の根 NGO としては稀有な存在として、ミャンマー政府、そして ODA を行う日本外務省から高い評価を受ける活動をしています。

また、緊急支援活動も行い、海外では、スマトラ沖地震によるスリランカの被災への支援、ミャンマー・サイクロン被害支援事業などを実施しました。国内においては阪神・淡路大震災支援事業、新潟中越沖地震、東日本大震災、熊本大地震での緊急支援を行ってきました。

国際協力を行う組織として、海外の事業だけではなく国内の課題解決も必要であるとの認識で2009年より中山間地の過疎地域を中心に地域活性化事業にも取り組んでいます。耕作放棄地の保全、都市と田舎の交流事業、などを途上国で行っていた参加型開発のノウハウを活用して活動など、国内外のそれぞれのノウハウを活かして活動を行っています。

特定非営利活動法人地球市民の会
会長 佐藤 昭二



▲支援しているミャンマーの子どもたち



▲日中韓大学生交流



▲風船と子ども



▲労働奉仕する村民 ミャンマー随想



▲苗木もめん（佐賀市富士町）



▲ボーオ族の村の子供たち

特定非営利活動法人 日本イラク医療支援ネットワーク



東京都

1991年の湾岸戦争と、2003年のイラク戦争で使用された劣化ウラン弾の放射能の影響と思われる、がん・白血病の発生率が増加したイラクの子どもたちの窮状を救うために、NPO、市民グループ、企業、日本とイラクの医師たちによって2004年に結成された。2012年にNPO法人に認可され、戦争の影響によってがんや白血病などに罹るイラクの人々が医療を受けられ、命が助かることを目指し、①効率よく、②専門性をもち、③継続的に支援を行い、平和で安心できる社会づくりを目指している。また、国内外を問わず放射能汚染から人々を保護するために必要な活動を行っている。東京とイラクのアルビルに活動の拠点を置く。

JIM-NET 代表
鎌田 實

「モスルの思い出とともに」

授賞式の前日にイラクから帰国し、成田からホテルに直行いたしました。モスルが「イスラム国」から解放され緊急に抗癌剤などを病院に届けるオペレーションを行っていたために帰国がぎりぎりになってしまいました。

式典に臨みながら、今まで出会ったイラクの子ども達のことを思い浮かびました。JIM-NETを作るきっかけとなったのが、2003年、イラク戦争開戦前にバグダッドを訪問した時のことです。小児がんの専門病院では、患者の親御さんに呼び止められ、「薬がないんです。何とかありませんか?」とか、「日本で治療を受けられないのでしょうか?」と相談されました。イラクの医者は、「あなたが、今、薬を届けたところで、それは偽善にしかありません。なぜなら、がんの治療には2-3年かかります。その間の薬がそろわないと、命は助からないのです」当時のイラクは大量破壊兵器を所有ないし、開発しているとして経済制裁を受けていました。抗がん剤は、化学兵器に転用されるとして、制裁の対象になっていたのです。

「イラクは石油の取れる国です。経済制裁がなくなれば、自分たちでやっていけるんです。国際社会に伝えてほしい。私たちは、薬が必要です。それは、大量破壊兵器を作って人を殺すためではありません。この子どもたちを救うためなのです。武力行使をしなくて、経済制裁を解除してほしいのです」

その時入院していた12歳の少女、ラナのことをはっきりと覚えています。私が病室で絵を描いて欲しいというと、ほとんどの子どもが、(描き方を)知らないというのに、彼女は喜んで描いてくれたのでした。腕には点滴のチューブが刺さっていましたが、鉛筆を握りしめて力強く描いてくれたのは、日本人の少女と手をつないでいる絵です。「ともだちになりたい」といっていました。彼女はちょうど20日前にモスルというところから白血病で入院してきたそうです。私は、その絵を大切に日本に持って帰り、TVなどで紹介してもらいました。「戦争がはじまったら、入院しているような弱い子どもたちから死んでいきます」といって戦争に反対しました。残念ながら、戦争を止めることはできなく、アメリカの戦勝がはじまってから、イラクに戻り病院を訪問すると、ラナちゃんは私があつて5日後に亡くなったということを知りました。半年ぐらいたち、どうしてもラナちゃんの家族に会い、何もしてあげられなかったことを謝ろうと思い、モスルまで出かけていきました。

しかし、謝る前に、ラナちゃんのおばさんが出てきて、「あの時、病院には外国人

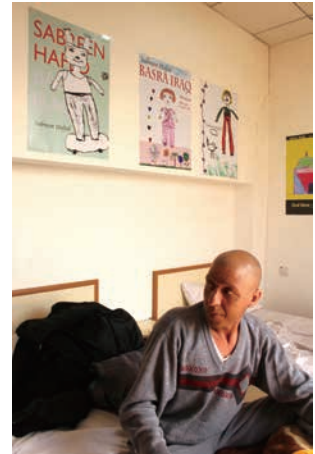
がたくさん来て、写真ばかりとっていった。あの時薬があれば、ラナは助かっていたんです。どうして、助けてくれなかったんですか？」「いや、経済制裁で薬は持ちこめなかった」

「じゃあ、助けようという気はあったんですか？」「もちろんですよ。だから、今は、病院の支援をしているんですよ」

「遅すぎる。遅すぎるわ」と逆に説教をされました。しかし、その時の「遅すぎる」といわれた言葉が耳から離れず、今できることをやろうと周りの人たちに声をかけて立ち上げたのが日本イラク医療支援ネットワーク（JIM-NET）で気が付くと13年が経ちました。本当はもっと早く支援が必要でなくなるのではと思っていましたが、それどころか、「イスラム国」との戦いで状況は悪くなるばかりです。今回の受賞はとても励みになりました。ラナちゃんのお婆さんの「遅すぎるわ」という言葉がまた耳から離れなくなりました。

受賞に恥ないようにこれからも頑張ります。ありがとうございました。

JIM-NET 事務局長
佐藤 真紀



▲がん患者と家族のための宿泊施設



▲薬が病院に届く



▲イラクの病院を訪問し巡回に立ち会う鎌田代表 [左]



▲イラク戦争前にバグダッドの病院で出会った白血病のラナちゃんとの約束からJIM-NETが立ち上がった



▲がんの子どもを見舞う佐藤事務局長



▲モスル解放作戦で難民化したがんの子どもたちが病院に来れるように手配



▲ラナちゃんが描いた「日本の友達と私」



▲病院に薬を届ける

NPO 法人 日本ベラルーシ友好協会



秋田県

1992年からチェルノブイリ原発事故で被ばくしたベラルーシのための医療支援を行っている。事務局長の佐々木正光さんがベラルーシの医師と出会い、日本の医療技術でベラルーシの被ばく者を助けてほしいとの依頼を受け、秋田県を中心とした医師や企業関係者を集め、前身となる秋田ベラルーシ友好協会を設立した。毎年同国の若手医師を秋田大学医学部に招聘し、半年間医療技術を学んでもらうプロジェクトを行い、これまで73人に、彼らの渡航費、滞在中の生活費を支援している。卒業した人の中には世界の医学学会の中で活躍する人も輩出するなど、特に血液学で同国の医師にとって秋田医大への研修は登竜門のようにになっている。医師への研修以外には、同国の血友病協議会の要請に基づいて、血液分離機、血液凝固能力検査装置や使い捨て医療用手袋など延べ3万点もの医療器具を送っている。

理事長

三浦 亮

1986年4月26日、ウクライナ共和国のチェルノブイリ原子力発電所4号炉の爆発。

鎮火まで10日間も火災が続きました。爆発による直接の死傷者に加え、風向きと降雨で放射能高度汚染地帯は広く拡がり、中・長期に亘る甲状腺・血液疾患の増加が報告されています。

当時、厳しい東西冷戦が続いていましたが、この原発事故も一つの誘因となって共産主義体制の矛盾が一気に噴き出し、3年後の1989年11月にはベルリンの壁が崩壊、冷戦の終結、翌年には東西ドイツの統一、ソビエト連邦の解体、と歴史の歯車は急速に回転しました。当時から、佐々木正光氏（現日本ベラルーシ友好会事務局長）が商業人として現地の実情を眼にし、ベラルーシへの直接支援を企画して精力的に活動し、秋田県の医療界、政財界、そして一般市民への呼びかけで、秋田ベラルーシ友好協会を発足させました。

医療機器、資金援助等に加えベラルーシより若手医師を招いて、直接の医療指導を計画しました。当時、国際骨髓移植施設として東北で一校のみが認められていた秋田大学医学部へも協力の打診がありました。血液疾患診療の責任者であった私、三浦亮（当時秋田大学内科教授、後に学長、現日本ベラルーシ友好協会理事長）は、積極的に研修医の引き受けを決断しました。1992年6月ベラルーシのゴメル市民病院で血液疾患の診療にあたった26歳のユリ・シェーフエルが来秋し、1年に亘る秋田大学病院での研究を指導いたしました。

以降25年、専門分野、研修期間はさまざまですが、現在まで80名以上の医師が来秋しています。研修病院も大学病院のみならず、いくつかの市内の病院さらには、隣県の岩手医科大学等も参加し、血液学、内分泌学、外科、小児科、整形外科、臨床検査科など、多くの領域で研修を受けました。この中から、後にミンスク医科大学（現ベ

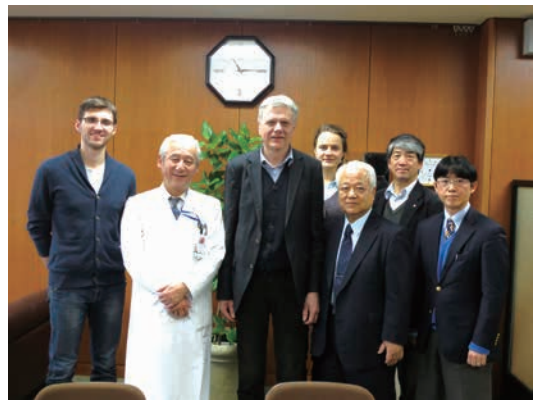
ラルーシ国立医科大学) 学長、研究所長など、優れた地位まで昇進、活躍している医師も多数おります。秋田からベラルーシへ指導に訪れた医師も多く、現理事長である私、三浦も1993年と友好25周年の2016年にベラルーシを訪れ、講演を行なっています。秋田県内の支援者としては、政界、財界、民間人、さらには高校生までも参加しており、本NPOの活躍はしっかりと秋田に根をおろしています。

今回の社会貢献支援財団からの表彰は、我々の努力と実績が広く認められたものであり、これを契機に今後とも両国の友好推進に努力していきたいと決意しております。

NPO 法人日本ベラルーシ友好協会理事長
三浦 亮



▲ベラルーシ訪問（保養派遣）



▲研修医 医学部との協議



▲研修医回診（秋田大学）



▲東日本大震災6年講演会（三浦亮）

特定非営利活動法人 アクセス - 共生社会をめざす地球市民の会



京都府

1988年から京都市に拠点を置き、フィリピンと日本で貧困問題に取り組む国際協力NGO。「10人に3人が小学校を卒業できない」とされるフィリピンの都市貧困地区と農漁村貧困地区で、子どもを対象に奨学金の支給や学校建設、授業料無料の幼稚園運営、給食などの教育支援事業を行い、女性には収入を得てもらうための仕事を提供して、生活改善のための支援活動が続いている。日本国内では、教育機関での講義や講演などの啓発活動、フェアトレード商品の開発・販売やボランティア活動の促進などを行っている。スタディツアーや現地訪問を通じて日本とアジアの市民の相互交流をすすめる、アジアに市民のネットワークを広げて、貧困のない、基本的人権の尊重された平和なアジアをつくることをめざし活動している。

理事長
新開 純也

このたびは、社会貢献者として表彰いただき、誠にありがとうございます。「フィリピンで出会った友人たちの力になりたい」と願う人々による29年間の営みが、こうして認められたことを、とても嬉しく思っています。

1988年に活動を始めた当会は、1990年にはフィリピン現地事務所を開設し、フィリピンの仲間たちと共に貧困削減に取り組んできました。以来、さまざまな試行錯誤や失敗を繰り返すなかで、私たちが大切にしたいと思うことが少しずつ形になってきました。それは、以下の2つの考え方です。

1. 貧困問題を解決する主体は、日々貧しさと苦闘している住民自身であり、貧困問題を解決したいと願う一人ひとりの市民である
2. NGOとしての当会のミッションは、こうした貧困と苦闘する住民や、貧困問題を解決したいと願う市民の問題解決力の向上であり、両者の間の直接の協力関係を創っていくことである

当会の奨学金（里親）プログラムでは、日本のサポーターにお金を出していただき、小学校への就学を支援していただいています。単に経済的な支援を行うだけでなく、保護者の組織化を進め、子どもの権利に関するセミナーや研修を行うことで、自分たちで問題を解決する力をつけてもらうよう働き掛けてきました。そうした日々の営みの中で、保護者会の会議では、小学2年生の子が教師に頭を叩かれ学校に行くのが怖くなったしまったことについて話し合われ、保護者会メンバーの後押しを受けて母親が学校の苦情委員会に訴えることができたり、家が貧しく魚売りやくじの売上の集金などで家計を支えるために学校に行けない子についても、メンバーたちが少額を出しあって、学校に行かせるよう親を説得したりしています。このように、地域が抱えている子どもの権利や福祉の向上という課題が、保護者会の活動の中で、議論され、お互いに助け合い、励まし合いながら行動に移されるようになってきています。

「毎日の生活は絶望的である。挫けそうにもなる。でも自分たちの生活を少しでも

良くしようと支援してくれる人たちがいる。そんな人たちがいるのに、自分たちが挫けていてどうする。頑張らねば、という気になる。頑張れる」プログラムに参加する住民の言葉です。

当会をこれまで支えてくださった多くの会員・サポーター・支援者・ボランティアの皆さまと、フィリピンの貧しい人たちとのかかわりを紡いできたこと。人と人との繋がりが、お互いに何かしら生きていく力になるような、そういう繋がりを国境を越えて少しずつ拡げてきたことが、今回の受賞につながったものと感じています。

認定NPO 法人アクセス - 共生社会をめざす地球市民の会
理事 / 事務局長 野田 沙良



▲アクセスが建設した小学校で学ぶ子ども



▲スタディツアーで現地の若者と交流



▲ピナツボ地区小学校での給食事業の様子



▲奨学金を得て小学校に通う子ども



▲フェアトレード商品生産の様子



▲フィリピンの若者の健全育成のためのワークショップ

ピナット～外国人支援ともだちネット



東京都

1991年に発生したフィリピン・ピナツボ火山噴火の被災者支援と交流を機に、東京都三鷹市の「はちのこ保育園」関係者や近隣の大学生などが集まり「地域レベルで、顔の見える国際協力・交流活動を進めよう」と発足した。現在、活動の大きな軸は「日本語教室」「子ども学習支援教室」「赤ちゃんのいる“国際ママ”のための交流会」これらの活動に共通しているのは「居場所づくり」。外国人ママの駆け込み寺的な存在となっており、頼りにされている。また、多文化共生に関する勉強会や、大学の授業への講師派遣、フィリピンを紹介する教材の貸し出し、行政や他団体とのネットワーク活動を行っている。

(推薦者：伊藤 みき)

主宰
山田 久仁子

この度は、私ども「ピナット～外国人支援ともだちネット」に対しまして、荣誉ある表彰をいただきましたことに心よりお礼を申し上げます。発足から25年にわたる地道な活動を評価していただけたことにメンバー一同何よりのことと喜んでおります。

7月21日の表彰式は、暖かい雰囲気とぬくもりを感じさせる式典でした。全国から集まった団体の報告は、同じ活動団体としても大変勉強になり、感動的でもありました。深く感謝申し上げます。

「ピナット～外国人支援ともだちネット」は、1991年のフィリピン、ピナツボ火山の噴火を機に、東京都三鷹市にある共同保育所「はちのこ保育園」の関係者や近隣の大学生などが集まり、「ピナツボ復興むさしのネット（ピナット）」として発足しました。地域レベルでの、顔の見える国際協力・交流活動を通してお互いの地域や社会をより良いものにしていくことをめざし、活動を始めました。最初はフィリピンのNGOと協力しながら被災者の生活復興支援に取り組み、国・文化を越えた相互理解、学び合いの活動を展開しました。

その後、メンバーの中から、「三鷹地域で働き、子育てしている外国人たちとも支援・交流の関係を築きたい」との思いが生まれ、外国人支援にも取り組むようになりました。また教員や在住フィリピン人たちと協働で地域の学校での国際理解教育の活動にも取り組むようになりました。ピナツボ支援から、三鷹地域に暮らす外国人支援へと軸足が移ってきたことを踏まえ、2015年5月、団体名を現在の「ピナット～外国人支援ともだちネット」に変更しました。

現在は、1)日本語教室、2)外国人の親を持ち日本で生まれ育った子どもたちを対象とした学習支援教室、3)乳幼児を持つ外国人ママの居場所づくり、および4)「寄り添い」活動(買い物や役所への付き添い、子育て支援施設への案内、保育園や幼稚園の入園手続き、進路相談など、暮らしの中の各種困りごとに対応)の4つを柱に活動を展開しています。またこれらの活動から得た学びや経験をより多くの人と共

有するために、学習会の開催や講師派遣、情報発信にも積極的に取り組み、同時に地域の国際交流協会や社会福祉協議会、保健センター、大学など、地域における横のつながりも大事にしています。

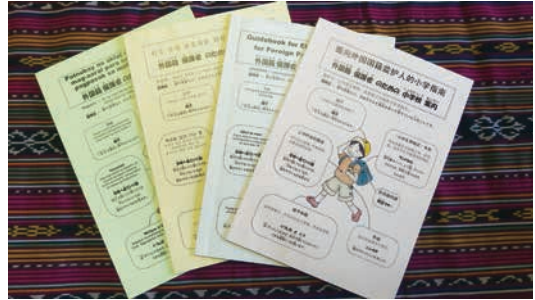
今後も引き続き、三鷹・武蔵野地域で、国籍や民族を越えてつながりあいながら、みんなが生きやすい地域づくりをめざして活動を続けていきたいと考えております。

この度は、本当にありがとうございました。

代表 山田 久仁子



▲不定期にさまざまなテーマでのイベントを開催し、メンバー同士の学びと交流の場をつくっています



▲外国籍保護者のための小学校案内を「やさしい日本語」でつくり、英語、中国語、韓国・朝鮮語、フィリピン語の対訳をつけました



▲外国籍保護者のための小学校説明会の様子



▲日本語教室（水・午前クラス）の持ち寄りパーティの様子
毎回めずらしい各国料理が並びます



▲外国とつながる子どもたちのために学習支援教室
ボランティアスタッフとマンツーマンで、学校の宿題をしたり、高校受験について相談したりしています



▲日本語教室（水・午前クラス）では、教科書を使った学習だけでなく、子どもたちの学校のお便りを一緒に読んで子育て相談にもなっています

イースタービレッジ・ミンダナオを支える会



イースタービレッジ・チルド
レンズハウス・ディレクター
祐川 郁生

北海道

1996年からフィリピンに滞在していた祐川郁生神父が、同国の児童養護施設と福祉政策の乏しさを目の当たりにして、カトリック札幌司教区の協力と、現地のカトリック・キダパワン司教区の協力を経て、2002年にスタートさせた児童養護施設「イースタービレッジ・ミンダナオ」の運営を援助している。2004年には会の援助により緑や南国の花々に囲まれて子どもたちがのびのびと育つ環境に新築され、少人数できめ細かいケアができる施設を目指している。0歳児からの受け入れを行っており、国内外の養子縁組も行っている。また、施設で育った青年の自立を目的にした訓練プログラムの実施や、幼稚園も発足させ、現在45名ほどの子どもや青少年のケアを行っている。同国から模範施設との適正承認を受けてはいるが、財政的支援は一切受けておらず、同会が日本のキリスト教会を中心に集めた寄附で運営している。

(推薦者：南 禎子)

「社会貢献者表彰式典に参加して」

道端で埃まみれになっても嬉々として咲いている一凛の花の美しさに目を向ける人はそう多くはいない。今回受賞させていただいたのは、そういう目を大事にしている方々のお目になかったことかなと感じている。

自分たちは決して社会に貢献したくて活動を行ってきたわけではなく、ただ一心不乱に子どもたちの明るい未来を見つめ続けてきた。そういった努力は世界各地の誰も見向きもしない場所で、かつて今も数多く行われているが、それを見つけ出し、評価しようとする人はあまりいない。

公益財団法人社会貢献支援財団なる組織が存在していることさえ、わたしたちは全く知らなかった。「友だちの友だちはまた友だちだ」方式で、「北海道いのちの電話」が昨年受賞され、たまたまその代表の方がイースタービレッジを推薦してくれた。そのつながりで今回の受賞に至ったのだった。そこには仏教的な用語を使っていえば何か「縁」なるものを感じます。

イースタービレッジ・ミンダナオは2002年、8月にフィリピン、ミンダナオ島南中部、キダパワン市で始められた小さな児童養護施設で、始めた当初は、右も左もわからず、手探りで始めた状態でした。数名の保護の必要な子どもたちと共に一軒の借家から始まった小さな活動は、日本全国の人たちに支えられて、発展してきました。創始者が日本人であるために、日本とフィリピンの文化や伝統、福祉観の違いなど、克服しなければならないことがたくさんある中で、何とか歩みを続けてこられました。特に、札幌を中心とするカトリック教会、プロテスタント教会の有志の方々が、「イースタービレッジ準備会」を結成し、チャリティーコンサートなどで資金を集めてくだ

さいました。そのおかげで、2004年、現在の場所に自前の一軒家が立ちました。その後、今回受賞となった「イースタービレッジ・ミンダナオを支える会」が中心となって物心両面にわたる援助を続けてきてくれました。

その期待に応えるべく、ビレッジは発展し、今回現地での正式名称 Easter Village Orphanage Inc. を改め Easter Village Children's Home. Inc. にし、より Child Friendly な施設を目指し、また、子どもたちが家族と絆を取り戻すように、それもかなわぬ場合は、家族と呼べる人たちを探し出し、子どもたちが健全に育つお手伝いできればと思っています。

イースタービレッジ・チルドレンズハウス・ディレクター
「イースタービレッジ・ミンダナオを支える会」 すけがわ 祐川 ふみお 郁生



▲イースタービレッジの夕暮れ



▲クリスマスプレゼントと持って来てくれた地元の支援者



▲ビレッジで誕生日を祝い食事のプレゼントをしてくれた家族と一緒に



▲子供たち



▲日本の高校生たちとの交流



▲日本の福祉関係の大学から来た人達と前庭で

平野 喜幸



ミャンマー

1995年からタイ、ミャンマーなどで国際協力活動を行い、2004年に地元熊本を本拠とする認定NPO法人「れんげ国際ボランティア会」に加わり、タイ国境のミャンマー難民支援活動に従事。2013年6月より、「れんげ国際ボランティア会」ヤンゴン事務所代表として、ミャンマーのエーヤワディー地方域で学校建設を通じた地域開発事業に携わる。水害多発地帯である同地で求められる堅牢な校舎建設のために、地域住民は「建設資金の4分の1」を自助努力で負担し、集められた費用は、彼らが組織した「地域開発委員会」の基金に蓄える。この資金を使い彼らのアイデアで実施される共同水田、籾殻発電、公共交通手段の提供などの収益で、教科書や文具、制服の提供、校舎の修繕、トイレや衛生設備の設置等の学校運営に係る費用が賄われ、さらに地域の開発を支えていることが可能となり、子どもたちの教育環境のみならず社会経済環境が長期的に維持・運営されている。平野さんは、日々現場に赴き、地域住民・地元学校関係者を叱咤激励しながら地域発展を支えている。

1991年から今日まで国際協力活動に携わりこのような賞を受賞できましたことを心より感謝申し上げます。

私は現在、ミャンマーのイラワジ管区で学校建設を中心とした地域開発事業を行なっておりますが、目的は単に学校を建設することではなく、地域の人々が自分たちの力で自立に向けて立ち上がることです。なぜなら、一方的な援助からは依存関係しか生まれず、自立に向けた協力関係は築けないからです。

私は若かりし頃、この開発の基本をタイの社会活動家、故ジャンロン・メキンクラ氏から学びました。爾来常に「目には見えない開発」を心がけてプロジェクトの実施に取り組んでまいりました。その他にも故吉田東洲氏、故和田金次氏、故末次一郎氏、故古賀武夫氏など今回の受賞に際し、私をこれまで育てて頂いた多くの方々のお蔭を感じずにはられません。また、不自由な生活も厭わずミャンマーに同行し活動を支えてくれた家族にもこの場を借りて改めてお礼を言いたいと思います。

合掌

認定NPO法人 れんげ国際ボランティア
ヤンゴン事務所 所長 平野 喜幸



▲イラワジ管区首相と懇談



▲村人にプロジェクトの参加を呼びかける



▲U Thant 作文コンクール受賞者



▲奨学金授与式



▲学校建設に参加する村人



▲学校の落成式

久野 美奈子



愛知県

1974年に重度身体障がい児と出会ったことで、「その子をなんとか治したい」という思いからヨガや針灸などの東洋医学を学び、健康づくりの普及活動を愛知県内外で、大きな大会を通じて長年行っている。ヨガの本を出版したことがきっかけで、インドで医療奉仕活動を行うことになった。久野さんの活動を知ったマザー・テレサから連絡があり1987年からインドの彼女の施設や路上で横たわる子どもたちやデリーのスラム街の学校などへの支援活動などを行う。この活動について愛知を中心に長野、岐阜、三重各県の小中学校や企業、市町村などで講演を行っている。講演先の小中学校の生徒から文房具や衣類などを託されると、同国の恵まれない子どもたちに直接手渡し、その様子をビデオに収録し、贈ってくれた学校の生徒たちに見せて現地の様子を伝えている。1999年よりNGO インターナショナル・ボランティアグループを発足させ、今までの活動が引き継がれている。これまでインドには50回以上も自費で渡航している。

この度は、社会貢献者にお選びいただき、貴財団の関係各位に心から感謝します。受賞の感想については、受賞前から私達にきめ細やかな事前配慮を見事にして頂き有難うございました。式典については、あの帝国ホテルで一番大きな会場で行き届いた会場準備をされ、貴財団のスタッフ全員が的確に見事な立ち振る舞いをしている姿は見事でした。会長の安倍昭恵様をはじめ表彰選考委員のスピーチは会場にいた人々に深い喜びと励ましを与えてくれました。表彰式の進め方も来場者すべての方々に、理解と感動を享受できるよう映像による説明など多彩な趣向を凝らして頂けたことを大変嬉しく思いました。

受賞者の内容も多岐にわたり様々なところで人命救助や社会貢献を、国内を始め地球規模で活躍している状況を目の当たりにして、日本人の人を愛する温かい心が活動の原点であることが確認できました。会場にいる皆さんも私と同様にボランティア魂をさらに光り輝かせ世の中をさらに良くしていくよう仲間を増やし頑張っていこうと誓ったと確信しています。さて、祝賀会も和やかな雰囲気の中で最高に美味しいお料理を頂けたことにも感謝いたします。さて、私の率直な気持ちとして、私たちが行ってきた41年間の活動はごく自然に、人として当たり前の事をさせて頂いたのでありこれからも与える人も与えられる人もお互いに喜び合える社会を創り上げていくそのことが日本を、世界を平和にしていく道であると確信しています。今後とも私と私の仲間が得意とする分野で人のために尽くしていきたいと思っています。具体的には、

1. 日本の次代の子どもたち（小・中学校）に心の教育を学校と協同して継続実施
2. インド・ネパールの恵まれない子どもたちへ支援物資提供（学用品など）の継続実施
3. インド・ネパール現地訪問による貧困者支援活動の継続実施
4. インド発祥の健康法、ヨガによる健康づくり普及活動の継続実施

さて、貴財団の支援活動は、日本を世界を明るく元気してくれる尊い存在感のある世界に誇れる組織であり、私達の様な人々に更なるやる気と励ましと力を与えて頂

きました。私にとって今回の受賞は夢のような出来事でした。本当に心からの支援にうれしくて涙が止まりません、有難うございました。なお、お預かりした副賞は、インド・ネパールの恵まれない子どもたちの支援に使用させていただきます。

久野 美奈子



▲マザー・テレサより教えを受けて



▲マザー・テレサの愛情あふれる話を真剣に聴く



▲医療奉仕活動 マザー・テレサ施設



▲健康づくり普及活動



▲日本の子どもたちのやさしい心を届けて



▲インドのスラム街の子どもたちに学用品を届けて 喜ぶ子どもたち



▲インドの恵まれない子どもたちに愛の贈物を託されて



▲マザー・テレサと共に歩んだ体験を話す



▲心と体の健康を願って出版

袴着 英子



福岡県

福岡県北九州市で1957年に洋装店を開き、1987年に北京市科学技術協会の招聘で日中技術者交流センターの訪中団に加わり、北京市服飾研究所と初の服飾セミナーを開いた。その後、中国側から縫製の基礎を習得したいと要望を受け、北京、天津、上海、広州、大連などの服飾研究所と交流し、製図から立体裁断などの技術指導をした。この活動が続き、教え子が指導者やデザイナーに育った。袴着さんの指導はいつも無償で、渡航費なども自己負担で行った。1999年に袴着さんら洋装店の経営者が中心となって「北九州市国際文化交流協会」を設立し、袴着さんは初代会長に就任した。その後、大連大学の学生を自宅に開放して受け入れ、日本の文化、生活体験、日本の大学生たちとの交流会などを開き、国際交流に情熱を注いでいる。

(推薦者：矢野 敏行)

「30年の歩みが、喜びになりました」

洋裁の技術を中国の人たちに伝えはじめてから30年になります。

帝国ホテルでの華やかな表彰式と祝賀会に、長年にわたり行動を共にしてくれた後輩女性、推薦者ご夫妻と出席しました。またパリ在住で服飾デザイナーの長男とデンマーク人の妻に長女、それに長女のお友達のオランダ人少女も加わって賑やかでした。

振り返れば、高校の家庭科に入学して2年生の頃、学びたい洋裁の授業が少なかったので思いきって洋裁学校に転校しました。今になって思えば、この決断が人生の大きな転機でした。

卒業して20歳の時に地元で洋裁店を開業しました。その頃は、デパートや洋品店は洋服のサイズや柄など品揃えが十分ではなく、洋裁店で仕立てる人が多い時代で、私の店も繁盛していました。2年後、サラリーマンの夫と結婚してまもなく長男が誕生しました。

その長男が、私と同じファッションの道に進み、外国でデザイナーになるとは夢にも思わないことでした。

「洋裁の技術を国際交流に活かせないだろうか」そんな思いを抱いていた1987年に、友人4人と日中技術者交流センターの訪中団に加わって北京を訪れ、初の服飾技術セミナーを開きました。続いて天津、上海、広州などでも洋裁の技術指導をしました。

中でも、私が住んでいる北九州市の友好都市、大連との交流は長く、毎年開くセミナーを最前列で受講していた生徒さんが、立派な指導者やデザイナーに育ってくれたのは大きな喜びでした。

私たちが習得した洋裁の技術は、元々はヨーロッパやアメリカから学んだもののなの

で、これを中国など他の国の人たちに伝えるのは、一つの使命ではないかと考えています。

私はすでに80歳を超えましたが、これからも洋裁の技術指導を中心に、留学生のお世話や若い人の国際交流などにも力を注いでまいりたいと考えています。

この度の表彰式と祝賀会に参加できたことは、生涯の喜びです。



▲大連大学と北九州の学生が交流



▲大連大学の学生6人が袴着さん宅でホームステイ



▲大連服飾祭のファッションコンクール



▲大連毛皮協会の発会式



▲中国成都でアジア7か国ブライダルサミット



▲インドネシアで黄金の蘭のファッションショー



▲最初に北京で開いた服飾技術セミナー



▲大連市が外国人に贈る最高賞星海友誼賞を受賞

年度別表彰分野・受賞者数の実績

分野	年/回										小計
	1回 昭46	2回 47	3回 48	4回 49	5回 50	6回 51	7回 52	8回 53	9回 54	10回 55	
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ				②笹川記念会館						

分野	年/回										小計
	11回 昭56	12回 57	13回 58	14回 59	15回 60	16回 61	17回 62	18回 63	19回 平元	20回 2	
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	②笹川記念会館										

分野	年/回								小計	受賞者 合計
	21回 平3	22回 4	23回 5	24回 6	25回 7	26回 8	27回 9	28回 10		
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16	343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	298	1134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0	27	1658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147	1581	11458
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9		
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル				

分野	年/回	29回	30回	31回	32回	33回	34回	35回	36回	小計	受賞者 合計
		平11	12	13	14	15	16	17	18		
第一部門 緊急時の功績		6	5	6	8	5	4	5	2	41	
第二部門 多年にわたる功労		14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門 特定分野の功績 (海の貢献賞)			4	7	8	8	11	9	9	56	
(国際協力)			2	2	1	3	3	4	2	15	
(ハッピーファミリー)			2	2	1	0	2	0	0	7	
(21世紀若者)			0	0	2	1	3	1	2	9	
子ども読書推進賞			2	3	4	4	3	4	5	25	
小計		20	24	24	28	29	29	28	32	214	11672
開催日		11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
式典会場		④	①	④東京全日空ホテル							

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。

平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。

平成15年度より子ども読書推進賞を新設。

分野	年/回	37回	38回	39回	40回	41回	42回	43回	44回	45回	小計	受賞者 合計
		平19	20	21	22	23	24	25	26	27		
人命救助の功績		9	13	11	11	8		3	9	0	64	
社会貢献の功績		33	35	34	34	39		36	35	47	293	
特定分野の功績 (海の貢献賞)		1	2	3	5	2		2	0	0	15	
海への貢献の功績									3	2	5	
子ども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門バストラ		1									1	
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 帝国ホテル							128	12			140	
小計		44	50	48	50	49	128	53	47	49	518	12190
開催日		11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30		
式典会場		④ ANA インターコンチ ネンタルホテル				⑤帝国ホテル						
											12190	

平成19年度より分野名を変更。子ども読書推進賞は最終回。

平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

平成26年度より特定分野の功績(海の貢献賞)は海への貢献の功績に変更。

分野	年/回	46回	47回	48回	49回	50回	51回	52回	53回	54回	小計	受賞者 合計
		平28	28	29	29	30	30	31	31	32		
人命救助の功績		9		11							20	20
社会貢献の功績		11	51	17							79	79
小計												99
開催日		7/1	11/28	7/21								
式典会場		⑤帝国ホテル										
											12289	

平成28年度より年に2回式典を開催。

都道府県別受賞者内訳

県名	第47回 までの累計	第48回 受賞者	受賞者数
北海道	648	4	652
青森県	180		180
岩手県	214		214
宮城県	384	2	386
秋田県	123	1	124
山形県	154	1	155
福島県	176		176
茨城県	198	1	199
栃木県	146		146
群馬県	243		243
埼玉県	468	1	469
千葉県	397	1	398
東京都	1,153	5	1158
神奈川県	616	1	617
新潟県	260		260
富山県	144		144
石川県	143		143
福井県	205		205
山梨県	134		134
長野県	199		199
岐阜県	215		215
静岡県	310		310
愛知県	306	3	309
三重県	164		164
滋賀県	98	1	99

県名	第47回 までの累計	第48回 受賞者	受賞者数
京都府	206	1	207
大阪府	481	1	482
兵庫県	514		514
奈良県	111		111
和歌山県	143		143
鳥取県	91		91
島根県	111		111
岡山県	306		306
広島県	410		410
山口県	272		272
徳島県	176		176
香川県	195		195
愛媛県	150		150
高知県	72		72
福岡県	543	2	545
佐賀県	125	3	128
長崎県	268		268
熊本県	226		226
大分県	126		126
宮崎県	71		71
鹿児島県	140		140
沖縄県	159	1	160
その他	87	1	88
合計	12,261	28(30)*	12,289

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名 その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計

* (30)は人命救助の功績の袋本将史氏（滋賀県） 伊藤修一氏（愛知県） 八木隆太郎氏（愛知県）として
足した数。受賞者件数は28件

役員・評議員一覧

平成29年12月1日現在

会 長	安 倍 昭 恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副 会 長	内 館 牧 子	脚本家、東北大学相撲部総監督
理 事	犬 丸 徹 郎	株式会社 和光 取締役執行役員
理 事	澤 井 俊 光	一般社団法人 共同通信社 外信部長
理 事	永 嶋 久 子	株式会社 資生堂 元取締役
理 事	三 谷 充	三谷産業株式会社 取締役会長
理 事	屋 山 太 郎	政治評論家
理 事	天 城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
監 事	篠 原 由 宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監 事	中 村 元 彦	中村公認会計士事務所 所長
評 議 員	石 井 宏 治	株式会社石井鐵工所 取締役社長
評 議 員	尾 島 俊 雄	銀座尾島研究室 主宰
評 議 員	久 米 信 行	久米繊維工業株式会社 取締役会長
評 議 員	今 義 男	元公益財団法人 笹川平和財団 顧問
評 議 員	重 村 智 計	早稲田大学 国際教養学部 教授
評 議 員	中 島 健一郎	株式会社 ACORN 代表取締役
評 議 員	広 渡 英 治	公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会 専務理事兼事務局長

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<http://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2018年3月15日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION

